雛の館－資料３

御殿飾り（林重見家蔵）

明治１０年（１８７７）第１回内国勧業博覧会が開かれ、節句行事が復興してくる。「古き佳き時代」を懐かしむ風潮が、各家庭で盛んになったと言われている。従って壇飾り創作や、御所の寝殿造りと雛飾り等が盛んになる。本品は高さ１２４ｃｍ幅１４１ｃｍの大型の紫宸殿を見立てたもので、明治中期頃の御殿である。

享保雛（細谷正二家蔵）

本品は、男雛３３ｃｍ、女雛３０ｃｍの大きさで、男雛の両袖がぴんと張っており、享保雛の特徴と威厳のある姿をしている。男雛の束帯と女雛の唐衣は、紺地に「飛雲の龍紋」の金襴地の共裂を用いている。

御殿飾り（細谷巌家蔵）

本品は紫宸殿･渡り殿･常御殿の様式から成り、大正初期につくられたものである。内裏雛を始め三人官女ともに芥子雛である。御殿は巾１３８ｃｍ、高さ７５ｃｍの大きさで、両サイドに桜と橘が配置されている。また渡り殿の前庭に矮鶏が遊ぶ。

享保雛（兼子昭平家蔵）

寛永雛・元禄雛の時代が過ぎて、享保（1716～36）頃に入ると工芸的要素に技術が進み、大型雛が町家の間に流行する。これを享保雛の名で呼ばれる。本品もその一つである。男雛４７ｃｍ、女雛４２ｃｍで、共に紫地の金襴地の装束を着ている。

古今雛　（河北町所蔵）

古今雛は明和（１７６４～）の頃、江戸池の端の大槌屋が、原舟月に顔を彫らせ、有職雛にヒントをえて、新型の雛が世に出ることになる。古今雛は従来の雛とことなり写実的で容姿も美しい。本品は３８ｃｍの男雛を４０ｃｍの女雛で、舟月の作と思われ端正な容貌をしている。

五人囃子（河北町所蔵）

江戸で作られた五人囃子は、袴も着けたものと、素袍を着けたものと二種類があった。本品は素袍の五人囃

子である。緞子の小袖に、紺地飛雲紋の金襴地の素袍をつけている。面立ちは丸顔で可愛い童顔である。明和時代（１７６４～）頃の作と思われる。（中腰の人形は３４ｃｍ・座っている人形２４ｃｍ）

明和（１７６４～）頃になると、近衛の舎人を模した随身が京都で生まれている。本品は頭が木彫胡粉仕上げの威厳ある面立ちから見て、初期的段階の作品と思われる。（高さ３１ｃｍ）双方とも緞子の束帯を着けている。

１２）時代に京都で制作されたものである。楽師たちの装束は、顕紋紗の狩衣に立烏帽子姿である。右側より鞨鼓・竜笛・笙・琴・楽太鼓を奏でている。頭はすべて木彫、胡粉仕上げとなっている。（高さ２７ｃｍ）

古今雛（兼子昭平家蔵）

古今雛は京都においても制作され、町家あたりで新型のお雛さまとして流行をみる。本品のような容姿をした古今雛が、この地方にも多く、京阪の交易によってもたらされたものと推察される。（男雛３０ｃｍ・女雛２８ｃｍ）で、頭は木彫である。

享保雛（長嶋匡一家蔵）

享保６年（１７１６）御触書によって、雛の寸法を８寸（２４ｃｍ）と定め、大型の雛製造が禁止される。本品はその後の作品で、容姿は享保雛の特徴が十分に生かされている。頭も木彫りで美しい。（男雛２９ｃｍ）

古今雛（槙 清哉家蔵）

本品は、京都製の古今雛である。男雛は両肘を張って威厳を現し、女雛の端袖は紅縮緬にぬいとりを施し、その美しさを誇張している。頭は木彫に胡粉仕上げとなっており、古今雛の初期の作と思われる。

随身（細谷正二家蔵）

有職五人囃子（槙 清哉家蔵）

本品は、雅楽を奏でる五人囃子で、寛政（１７８２～

享保雛（河北町所蔵）

享保雛は江戸中期、八代将軍吉宗時代当初の作で、

雛の館－資料３

町家や豪商あたりで飾られた。金襴地や錦地の裂地でつくられた装束は、豪華絢爛を競ったものである。本品は男雛４２ｃｍ、女雛３７ｃｍで、享保雛では中型といえよう。